

1 1

海部

大治町立大治中学校

ワカコ レン

名前 若子 廉

分科会番号 02

分科会名 外国語教育

「主体的に外国語学習に取り組む生徒の育成」

～ICT機器を活用した即時型フィードバックを通して～

1 はじめに

グローバル化の急速な発展や技術革新等により、社会構造や雇用環境が多様化している今、子どもたちはその様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決したり、多種多様な情報を見極めたりする力が必要である。さらに、多面的、多角的な視野をもち、新たな価値を見出すことが求められる。また、英語に限らず、外国語を学ぶということは、異なる言語や文化をもつさまざまな人達とつながりをもつ機会が多くできる。さらに、自国を他国と比較することで、より自国とはどういう国なのかと知り、理解し、深めることもできる。

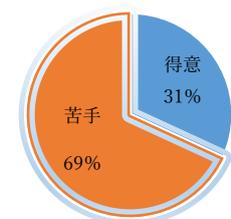
このように外国語を学ぶことは、とても重要であり、外国語をツールとして活用することで、より確かな情報や様々な価値を見出すことができると考えられる。

本校1年生は、活発で素直な生徒が多く、音読練習や復唱をする際には、大きな声で英語を読み取り、何事にも真面目に取り組む生徒が多い。また、苦手なことにもチャレンジし、一人でできないことは他者と協力したり、助け合ったりしている。

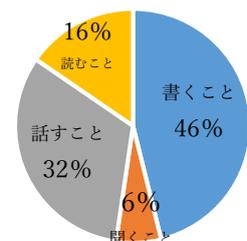
約100名に対するアンケート【資料1】では、英語を苦手と感じている生徒が7割近くいた。領域別では、「読むこと」や「聞くこと」の言語活動では、苦手意識をもっている生徒は比較的少ないと感じる【資料2】。一方で、「合っているのかわからない」と発言する生徒が多く、間違いに対してとても敏感になっていた。小学校での学習に比べて、「書くこと」や「読むこと」の活動が増え、さらに小テストや単元テスト、定期テストなどにより評価が点数化されることが要因のひとつだと考えられる。また、「話すこと」が苦手と解答した生徒も多かった。英文を「書くこと」に自信をもたせるためには、「話すこと」に対しても、苦手意識を軽減させることが大切ではないかと考えた。

本研究では、ICT機器を活用した即時型フィードバックを行う。即時型フィードバックとは、解答に対して、できるだけ早いペースで、その解答について反応していくことである。そうすることで、生徒がすぐに間違いや違う表現があることに気づき、修正し、正しく表現することができる。そこで、「できた」「分かった」などの体験をすれば、外国語学習に対して自信をもつことができるだろう。段階的に「自信」をもたせ、理解した情報を整理し、「伝えたい」「表現したい」という気持ちにつなげるとともに、主体的に外国語学習に取り組む生徒の育成を目指していきたい。

【資料1】英語学習は「得意」「苦手」



【資料2】苦手分野



2 研究のねらい

(1) めざす生徒像

外国語学習に自信をもち、思いや考えを表現したり、伝え合ったりすることの楽しさを味わうことのできる生徒

(2) 研究の仮説

- ① 即時型フィードバックを行うことで、生徒が「できた」をすぐに体験できることや、クラスメイトの表現を見たり聞いたり、教え合ったりすることで、外国語学習に対する自信を高めることができるであろう。
- ② 英作文などの「書くこと」の活動では、タブレットを活用すれば、苦手意識を軽減することができるであろう。

3 研究の対象 中学1年生 100名 (3クラス)

4 研究の方法

(1) 仮説に対する手だて

本実践を進めるための手だてを次のように設定した。また、同じ活動内で仮説1と仮説2の手だての実践を行う。

① <英語に対する自信を高めるための工夫 (仮説1に対して)>

ア 即時型フィードバック

生徒が提出した課題に対し、教師が即時にフィードバックを行う。また、生徒間で前向きなフィードバックを伝え合うようにしていく。

イ ICT機器を活用した対話活動

ICT機器を活用し、生徒同士の意見の共有や、対話活動を円滑に行えるようにする。

② <「書くこと」への苦手意識を軽減するための工夫 (仮説2に対して)>

ア ICT機器の活用

「書くこと」をタブレットで取り組ませる。

イ ライティングテスト

プリントを用いて段階的に小テストや英作文に取り組ませる。

(2) 仮説の検証

手だての有効性と仮説の実証性を確かめるために、次のような検証を行う。

① アンケート調査の実施 (4月・7月・1月に実施)

外国語学習への自信や苦手意識などのアンケートを実施し、その変容を分析する。

② 課題内容の比較

解答したことのある課題を再度出題し、内容量や表現力を比較し、その変容を分析する。

5 研究の実践と考察

① 英語に対する自信を高めるための工夫

ア 教師による即時型フィードバック

既習事項の理解の定着を目指すために、単元終わりや定期テスト後など、授業の復習として既習事項による問題演習を行った。英語に苦手意識をもっている生徒も取り組みやすいように、「ロイロノート」で並べ替え問題などをレベル別で出題した。また、自由英作文では正答を示す○や訂正箇所を線を引くなど、即時に返却して、生徒がすぐに確認できるようにした。訂正が多くならないように文法的な間違いに焦点を当て、生徒のモチベーションを下げないように配慮した。さらに、教師が“Good.”“Great.”など、前向きなフィードバックを行った【資料3】。生徒は、すぐに解答を確認することができ、間違いに気付き、再度行った。「できた」という体験を多くさせることで、外国語学習に自信をもって取り組んだ。さらに、正答した生徒のなかには、まだできていない生徒に教える姿があった【資料4】。教師によるフィードバックを通して、生徒同士が教え合う姿が多く見られた。自ら教える姿から、他者に教えることも自信を高められる方法の一つであるとわかった。



【資料3 教師からのフィードバック】



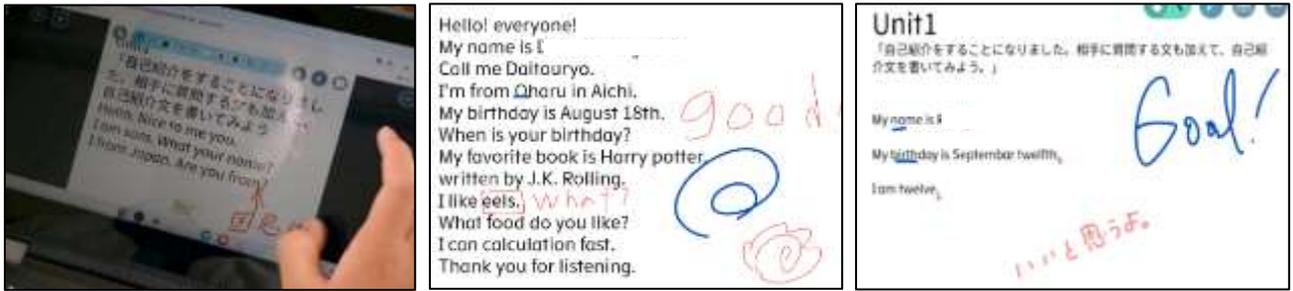
【資料4 活動の様子】

イ 生徒同士による即時型フィードバック

教師のフィードバックだけでなく、生徒同士のフィードバックも行った【資料5】。英語に対する自信を高めるためには、表現力の向上が必要であり、様々な表現にふれることが大切である。そこで、演習問題や自由英作文に取り組ませた後に、「ロイロノート」でペアに解答を送り、添削し合い、前向きなフィードバックを行った。ペアの解答を見て、自分の解答の間違いに気付く生徒がいたり、他者の表現方法を参考にして、自分の解答をよりよいものにしたりしていた。また、「書くこと」が得意な生徒と苦手な生徒でもペアにして行った。わからない単語に対して「What?」と書いてフィードバックを行う生徒がいた【資料6】。フィードバックを見た生徒は、その単語の意味をペアに教えていた。わからない単語があった場合、コピーアンドペーストをして自分で調べていた。このように生徒同士でフィードバックを行うなかで、相手に伝わらない単語や表現があることに気付くとともに、伝わるためにはどう表現したらよいかを考え、自ら調べる姿が見られた。このことから、表現力を向上させるためには、様々な表現にふれ、自ら探求することも必要であるとわかった。



【資料5 活動の様子】



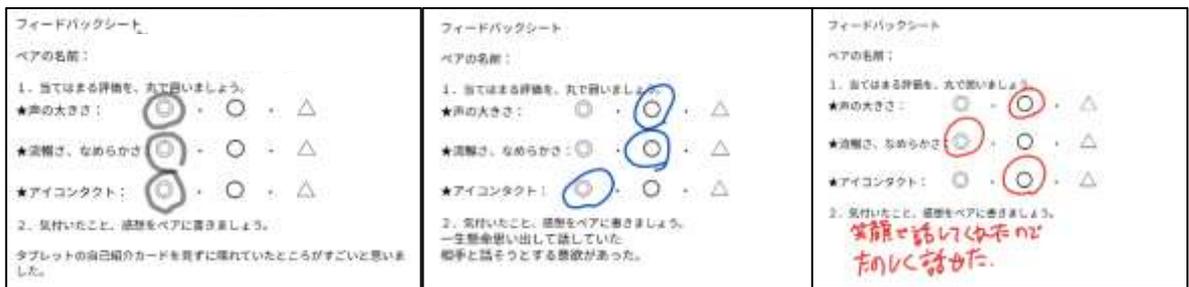
【資料6 生徒同士のフィードバックの様子】

ウ ICT機器を活用した対話活動

より客観的にフィードバックを行えるように、タブレットの録画機能を用いて、ペアで対話活動を行った【資料7】。活動に取り組みやすいように、自由英作文で一度扱ったことのある題材にした。「話すこと」が苦手な生徒に対しては、作成した英作文を参考にして対話してもよいことを伝えた。撮影した対話活動を見返した後に、生徒同士で前向きなフィードバックを行った【資料8】。生徒はフィードバックから、相手に自分の考えや気持ちを伝えるためにはアイコンタクトやジェスチャーも大切であることに気付いた。その後、ALTによるパフォーマンステストで、アイコンタクトやジェスチャーを意識して対話活動を行う生徒が多かった。



【資料7 対話活動の様子】



【資料8 生徒間フィードバック】

② 「書くこと」への苦手意識を軽減するための工夫

ア ICT機器の活用

「英語を書く活動において、タブレットとプリントのどちらが取り組みやすいか」というアンケートを行ったところ、生徒の約80%がタブレットの方が取り組みやすいと答えた。その理由には「分からない時にすぐ調べられる」や「プリントに書くより、やる気が出る」などの回答があった。そのため、「書くこと」の活動をタブレットで行った。代名詞を覚える単元では、何度も復唱させ、音とリズムで代名詞を覚えさせた。その後、タブレットを用いて、書いて覚える活動を毎時間行なった。英語を書く活動をゲームをするような感覚で楽しく取り組んでいた。答え合わせをする際は、ペアに解答を送り、添削し合った。この活動を繰り返し行なうなかで、「前よりできるようになっている」とペアに伝える生徒や、全問正解する生徒に対して、



【資料9 タブレットに書く活動】

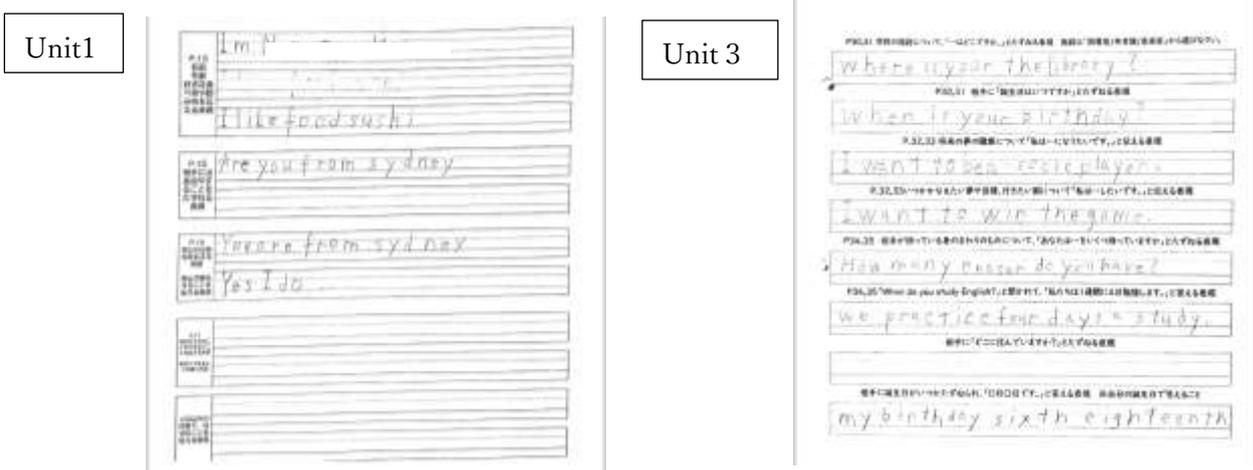
花丸を書いてペアに解答を返却するなど、自発的にフィードバックを行っていた【資料9】。授業後の振り返りでは、「できるようになった」や「花丸もらえた」など、「書くこと」の活動について嬉しそうに話す生徒や、結果を教師に見せに来る生徒がいた。

イ 振り返りシートによる、ライティングやテストの実施

各単元の終わりに振り返りとして、その単元で習った文法を使って英作文を行った【資料10】。振り返りシートは、教科書の基本表現を中心にこれまでタブレットでの並べ替え問題や自由英作文でも扱った表現を書かせるようにした。その結果、積極的に活動に取り組む姿が多く見られたまた、各問いに教科書の該当ページが記入されているので、「教科書やピクチャーディクショナリーを参考にして取り組むことができた」と答える生徒も多かった。スペルミスやクエスチョンマークの書き忘れ、分からない単語をローマ字で書くなどの生徒は多くいたが、ライティングを重ねるごとに書ける量は全体的に増えた【資料11】。



【資料10 活動の様子】



【資料11 一部生徒の振り返りシート】

また、紙媒体による類似問題の小テストも定期的に行った【資料12】。繰り返し行うなかで、小テストの結果が飛躍的に伸びた生徒や「できた」と発言する生徒の姿があった。一方で、「タブレットは取り組みやすいが、プリントでできた時の方が嬉しい」という生徒もいた。このような意見から、達成感の感じやすさは紙媒体の方があるとわかった。



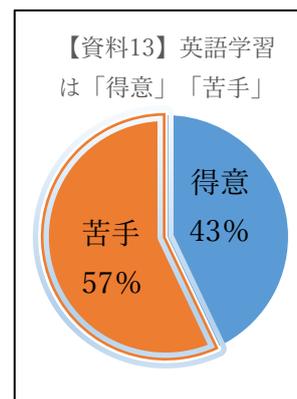
【資料12 活動の様子】

6 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

英語学習は得意か苦手かのアンケートを再度実施した。以前に比べ、「得意」と回答をした生徒が

約 12%増加した【資料 13】。仮説 1 に対して、「フィードバックをもらってどう感じましたか」というアンケートでは、「英語に自信がでた」「もっと頑張ろうと思えた」「嬉しい気持ちになった」などの回答があった。即時型フィードバックを取り入れたことで、生徒同士が学び合い、活動に参加しやすい雰囲気を作ることができた。さらに、教師がフィードバックを行うよりも、生徒同士がフィードバックを行う方が、より英語に対する自信を高めることが効果的であった。また、生徒同士が互いに教え合うことで新しい表現や語彙力を伸ばすことを可能にし、生徒が答えを出す不安感も減らしていった。



I C T機器を活用した対話活動では、生徒自身の発話の様子を客観的に見ることで、ペアや自分のよさに気付かせることができた。特に、ボディーランゲージやアイコンタクトも相手に考えや気持ちを伝えるために、大切であることに生徒自ら気付くことができた。また、前向きなフィードバックを行ったことによって、生徒の外国語学習に対する自信を高められた。

仮説 2 に対して、I C T機器を活用することで生徒同士が意見を共有し、学び合いやすい環境を提供することができた。生徒同士でフィードバックを繰り返し行うなかで、自発的に前向きなフィードバックをする生徒がいた。フィードバックはさまざまな形式があり、直接ペアに口頭で伝える生徒やシートに書いて伝える生徒など、より伝わりやすいように工夫していた。生徒同士のフィードバックが、より生徒の達成感につながった。また、「タブレットの方が間違えてもすぐ書き直せる」「解答が共有しやすい」「解答したらすぐに合っているかどうかわかる」などの意見が出た。タブレットで「書くこと」の活動に取り組ませたことで、振り返りシートや小テストなどに 4 月よりも意欲的に取り組む姿勢が見られ、「書くこと」への苦手意識を軽減することができたと考える。

(2) 今後の課題

即時型フィードバックを行うことで、生徒が学び合う雰囲気や環境をつくることができた。しかし、英語が苦手であり、特に「書くこと」が不安だと感じている生徒がアンケート結果から、まだ多くいると感じる。初めての定期テストを経験し、正確に「書くこと」が求められたことで、まだ「書くこと」への苦手意識をもつ生徒が多くいる。そのため、間違いを指摘するだけのフィードバックに終わらず、自分の思いや考えを正しく伝えるためにはどのような表現を使っていけばよいかを生徒自身が考え、教え合うための前向きなフィードバックを充実させていきたい。また、タブレットでの学習が生徒の外国語学習に対する苦手意識を軽減させるとわかった。しかし本研究では、タブレットを用いて「書くこと」の活動を、単語を書く活動で終わらせてしまった。この活動を言語活動につなげられるようなタブレット学習を今後、より充実させ、既習内容の定着や導入に活用していきたい。

7 おわりに

研究を通して、改めて生徒同士で学び合うことの重要性を感じた。研究対象が中学 1 年生ということもあり、学習の仕方がわからない生徒や、学習習慣が身に付いていない生徒もいる。今後も、英語を学び合う活動を積極的に行い、主体的に外国語学習に取り組む生徒の育成を目指していきたい。